

現場の声

平成 23 年 3 月 11 日に地震が発生し、津波が襲来、全交流電源が喪失して以降、現場作業員は、厳しく困難な現場での対応が続いた。

今回の事故対応にあたった事実関係の調査の中で、聞き取り等を通して、現場作業の厳しさ・困難さが明らかになった。以下に、当時の状況に関する現場の声を掲載する。

なお、これらは聞き取り等により得られた本人の記憶による生の声であり、事実でないことも含まれている可能性があるが、事故対応の状況を理解する一助として、敢えて掲載したものである。

【中央制御室の状況と、現場確認時の状況】

- 津波が来た時刻に 1,2 号の電源盤のランプがフリッカ（注：点滅）し、一斉に消えていくのを目前で見た。D/G が止まりバタバタとランプが消えていく状況だったが、何が起きたのか分からなかった。中操（注：中央制御室）の照明は、2 号機側はまっくら、1 号機側は非常用灯（薄暗いわずかな照明）に切り替わった。警報が全て消えて一瞬シーンとなった。2 号側が先だったような気がする。目の前で起こっていることが、ほんとうに現実なのかと思った。
- いつ頃か時間的には記憶に無いが、中操に**運転員が「ヤバイ、海水が流れ込んできている」と大声で叫びながら戻ってきた**ので、津波で海水が流入してきていると思った。
- RPS（注：原子炉保護系）の MG セット（注：電動機・発電機セット）復旧で現場に行った補機操作員から後で聞いた話。1 号は起動できないのですぐに帰ってきた。2 号は起動して**地下から聞いたことのない轟音がしてきたのであわてて階段を上がった**。S/B（注：サービス建屋）入り口から水が入ってきていた。水をかぶりながら引き上げてきた。
- 廊下（注：タービン建屋地下階の廊下）の中間くらいを歩いたら近くの火報が作動し、危険を察知し戻ろうとした。そしたら**急に電気が消えると同時に D/G が止まる音がした**。訳も分からず走り、M/C 室を通り階段を上る寸前に **D/G 室の気密扉より大量の水が流れ込んできた**。
- なぜか閉まるはずのない 1-2 号機の連絡扉が閉まっていて一人では開けられなく、二人で押して開いた。**開いたと同時に大量に水が流れてきて腰まで浸かりながら歩いていき、その時に初めて津波が着たと思った**。S/B（注：サービス建屋）1 階は 80cm くらい水があり、近くにあるものが色々流れていた。その後ビショビショのまま、中央操作室に戻り概要を話した。
- 恐怖心というよりも電源を失って何も出来なくなったと思った。若い運転員は不安